

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成15年
12月号

毎月23日発行
通巻400号

(題字 矢追日聖)

★発行日 平成15年12月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44-0015
★印刷 大倭印刷
★定価 1部 250円
年間購読料3,000円(送料共)
★振替口座 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



10月26日、火の山より壇ノ浦(関門海峡)を望む 矢追房子さん撮影 (一泊文化行事報告・4頁)

昭和55(1980)年初め頃の座談会から 大倭紫陽花邑に住んで(4)

「前進友の会」の皆さんを迎えて

大倭会館にて

「ほっとけ」の心

女性B 子供の世話などはどうされているんですか？

矢追鈴月 昔は一緒にしていましたけれど、今は各家庭でしていますね。

杉本順一 生活のあり方も時代と共に変わってきているみたいですね。今は個人家庭中心ですね。もっと前はホントに一緒くたに生活していたように聞いています。

女性B 個人家庭中心といっても、街の中だったら、預かってもらいたい時にも周りにそういう関係がないですが、大倭、だったら必要な時には協力関係が出来るという感じはしますね。

杉本 それはそうですね。
女性B 先ほど山岸会におられた方が、「何でここにいるのか分からないけれどいる」とおっしゃっていました。結局ここが居心地が良いからだと思いますね。居心地が悪かったら逃げていくでしょう？(笑)

「何で居心地が良いんだろう？」って考えていたら、みんな必要な時は協力する、必要でないときは好き好きにしているということ、それじゃないかなあと思うんですね。街中だったら、みんなが銘々好き好きにしているのは良いけれど、必要な時に協力できないとか、もし何か協力関係がある所には変な押し付けがあるとかだね。やりたい者はやったらいいけれど、やりたくない者はやらなくていい

いというのは、すぐく居心地が良いんだろうなあと
思つて、どうですか？

法主 ここは命令のない社会やものね。やっぱり人間の自由意思を一番尊重するしね。「今日こんな座談会があるんやで」と言つていても、肝心の中堅層が、今日土曜日でしょ、土曜の晩はマージヤンで朝までやつていますわ。それでも誰一人不思議に思わへん。

また飲んで管巻いている人がいてもみんな構わない、「ほつとけ」という感じですね。飲んで勝手に酔っているんやからね、池に落ちたかて構へんやないかと、ほつとおきます。

余所から来た人が一週間ぐらい居ても、必要なのは接触しているけれども、他の関係のない人達は「変わった人がうろちよろしているなあ」「何してるんやろ？」とそれで終いですね。居らんようになったら「ああ、もう姿あらへんなあ」で、「あの人はどうなんや？」と聞きに行く人もおらん。愛想しに行くんやあらへんし、身元調べに行くんやあらへんしね。(笑)

ここの人はそんなことにはホントに無関心です。そんな点は煩わしくないなあ。

女性A そういう人を受け入れる包容力というのは、経済的なこともあるでしょうし、気持ちの面でもあるでしょうし、始めからそういう風になっているのでしょうか？

法主 それは教育したのではなくて、ここの生活の流れの中にある伝統的なものですね。

人が来れば、ここは旅館と違いますからね、飯代払うわけじゃないし、布団も汚れるし後で洗濯はせんなんし、電気は使う、飯は食わす、水は使う、実際、消費です。

だから一方では生産面に従事している人は、一生懸命になつています。片方ではそんな全然関係

のない人が飛び込んで来て、ぼーっと遊んで、何日も居る。しかし苦情を言う声は聞いたことあらへんなあ。

最近もそんなケースがあつてね。子供連れの女性が、私の家の玄関に突然やつて来たんですよ。

離婚したいのやけれど、婿さんが子供をよこせと言つて離婚届に判を押してくれないらしい。夫婦では離婚することが決まつているけれども、嫁さんも子供を渡すのが嫌や言うねん。それで、婿さんが子供を取りに来るからと逃げているんやな。

九州の友達の家にしたけれど、もう居られへんからと藪から棒にやつて来たんです。「大倭へ行つたら何とかしてくれるんとかうか」と、その友達に言われたらしい。明日から行く所がないという者に、「余所へ行け」とも言えないし、「ここで自分の気持ちが始まるまで居つたらええやないか」言うて、それがもう二ヶ月ぐらい居るんやけれど、毎日何もしていない。子供連れて飯だけ食べてブラブラしている。普通の社会だったら目障りやわな。でもここの人達は何にも言わない。無関心や。最近少しぐらいお金を持ってきたと聞きましたが、それもこちらが請求したものでなくて、本人が自分からね。

男性B やつぱり世の中のことを考えたり、人生のことを考えていると、やつていることに対して成果を言いたくなつたり、未来像や希望やスロウガンなどを言いたくなつたりするものですよ。ここはあんまり言わないですね。

人のためでない、自分のために

法主 私はまあ、みんな助けあつてね、飯を食うていつたらええやないかと思うんです。

もしも私が死んでしまつたら、「後はどうなる

か？」と聞く人がよくあるけれど、そんなのは分散しようがどうしようが、残った者で好きにやつたらええ。死んだら構いに来られへんし、そんなこと知らんしね。いつ死ぬのかなんて分からへんし、そんな先のことまで考えていたら神経衰弱になるわな。

男性B だいたいちよつと善いことをしたり、ちよつと善い理想を持つと、「世の中のためになるんだ」とか「他の人のためになるんだ」とか出したくなりませよ。そういうような気持ちは起らないんだらうかということなんですけど……。

法主 そんな気持ちは全然ありません。(爆笑)これは私のエゴなんです。私は自分のためにやつているんです。人のためやないんですよ。

例えば昔のことですが、精神分裂の娘さんがいたんです。結婚してすぐに婿さんが徴兵で取られて戦争に行つて——二ヶ月ぐらい結婚生活したんかねえ——南方へ行く途中の船で撃沈されて死んでしまつた。その娘さんは田舎の農協に勤めていて、そろばんとか計算を間違えたことの無い、しつかりした優秀な人やつたらしいんやね。それが時々計算を間違つたり、家庭におつて箒で掃いた後にいつもはきちんと後片付けするのに畳の真ん中に箒がほつてあつたりね。お母さんにしてみたら「不思議や」と思つていたら、ボチボチと精神分裂になつてきたんやね。ご主人が戦死したショックからやつたと思うんやけれど、精神病院へ連れて行つたり、いろいろしたんやね。ここへ来た動機も、「大倭に偉い神さんがいはる。あそこへ行つたら、たいていの病氣は助けてくれる」と聞いたらしい。どこでそんなことを聞いたのか分からんけれど、和歌山の奥の人や。母親が娘さんを連れて来たんです。私は精神的な病氣とか心身障害とかいろいろ見てきましたので、パツと見た

ら、だいたい分かりますね。医者じゃないですけど、直感で……。それで、「折角大倭まで出て来てね、神さんの力で病気を治してもらえと思つたかしらんけれども、神さんは病氣治すものやあらへん。これは純粋な精神分裂やから、歳が行くほど悪くなるやろし、治ることは絶対ありません」とはつきり言うてしまつたんですね。

そしたら母親が悲嘆してね、「私は、もしこの子の病氣が治らないと聞いたら、この子を殺して自分も死んで家には帰らないつもりで出て来ました」と、そんな決意まで言うんやねえ。弟や妹の縁談にもさしつかえるんで、親としたら非常に悩むわけなんです、「そうすれば家族が助かる」と。そこで「それなら結論から言えば、分裂症のこの子があんたの家庭になかつたらいいんでしょ。そしたらその娘さんを私がもらいますよ」と言つたんですね。すると母親が「身内の者ですら面倒みるのに困り果てているのに、一見で他人さんにこんな子を当てごうてそれでは私の氣持ちがとても承認できない……」とポロポロ涙こぼして泣きはるしね。それからいろいろと話をして、「この子があなたの家にいたら、あなたの家のみんなが惨めになるんや。私がこの子をもらつても、私は苦めならんよ。そのかわり——ここには池もあるし、適当な松の枝もたくさんある——知らん間に首を括つたりあるいは池に飛び込んで、大倭へ連れて行つたから、あの子はあんなつた、そういうような責任を私に被せないでくれるんやつたら、無条件で私の子供として貰いますよ」と説得したんです。母親は涙こぼして帰りましたけれどね。その娘さんは二十七歳くらいで来たんですが、だいたい長いこと居りまして何年か前に亡くなりましたわ。

そのお守りが大変でした。家のおカアちゃん

(鈴木母さん) がほとんどお守りしてくれたんですが、ほつとけないからお使いにも連れて行かんなんし、池の中から「何かが出てくるーっ」と米やらいろんな物を放り込むしね。子供がたくさんいたから、錯覚起こして子供に危害を加えたらあかん。とてもじゃないけど家では監督できない。心安い精神病院へ私の子供とて頼んで、調子が良い時は家に居つて、調子が悪くなつたら病院へ連れていつたり、そんな方法で面倒をみたんですね。結局、これは私の生き方なんだけれども、さつき言つたように私のエゴやから、傍の人に非常に迷惑になるんやね。私自身はどうもないけれども現実問題は一緒に生活している人達に何らかの負担をかけるわね。私が二十七歳の娘さんを朝から晩までお守りしているわけにもいかんしね。

そういうような面があるんやけれどもね。というて、「私はあそここの家庭を救済しました」とか、「大倭によつてあそここの家庭が救われた」とか、公言はしません。私は好きでやつているんですから、言う必要がないもんねえ。向こうの母親から見れば、「大倭はホントに生き神さんや。あの神さんに家の娘取つてもらつたので、みんなが幸せに暮らせる。足を向けて寝たことない」と死ぬまで言うてたけれど、勝手に喜んどつたら良いやしね。私には関係ないんやから……。

来る縁、出て行く縁

法主 私はそんなことをしていくのも、半面、自分の宿命だなと思つています。ここでは今日までの間に、そんな話は切りがないんです。世間から言えば社会救済かもしれないんですが、言うてみたら一種の道楽ですねえ。そのかわり、うちの家族の者に迷惑かけるから氣の毒やなあ、というものだ

けは自分の中にあります。

女性A 六年ほど共同保育というのをやっていたんです。子供と一緒に助け合つて育てていこうと専門の保母さんはいなくて母親と父親で、朝から夕方までなんです。街の中の小さな家を借りてお金を持ち寄つてやっていました。お互いの家に泊まりに行つたりもしていました。

母子家庭になつた人とか、そこに入りたいたい人が訪ねて来たりとかするんですけども、一緒にやれる許容量が非常に狭いわけですねえ。いつもそこにぶつかつてしまふ。

多分、「前進友の会」がおやりになつている街の中の共同住宅でも、そんな問題が出てくると思ふんです。お互いに助け合つていく時に、生産もしていけばそういう障害も越えられるのかしら。今日のお話では、許容量の大ききさというのを簡単に越えてこられたように聞こえるのですが、どういふふうに克服してこられたんでしょうか？

あるいは新たに入つて来る人が、今までの社会で身につけてきたもの、それを払い除けていくという作業も多分あつたんじゃないかなあと思ふんですが、その辺のお話を、もしあれば聞かせて下さい。そういう人が訪ねて来た時に、短い期間ならともかく、なかなか受け入れられない。ぶつかつてぶつかつて、それでも捨てきれないものをお互いに持つているんだなあとも思ふんです。

法主 ぶつかつたと感じたことがないですね。みんながそれだけ協力してくれているからだと思ふんですけれどね。別に計画的にやっているわけではないんです。私は自然の流れ通りに行くからあんまり計画しない方ですしね。

来る者は縁があつて来るんやからええやろ、出て行く人は縁が薄かつたから出て行くんやろと、氣楽に物事を見えていますけれどね。(続く)

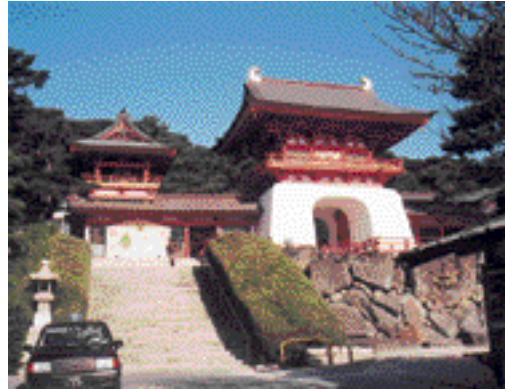
人・倭・今・秋の 一歩・消・埃・行

第276 回文化行事報告

平成15年10月26～27日



▲壇ノ浦の日の出 (10/27 李章根さん写)



▲赤間神宮 (10/27 石田昌男さん写)



▲安徳天皇陵の前で (10/27 齋藤正宏さん写)



▲七盛塚 (10/27 齋藤正宏さん写)

魂魄の地、壇ノ浦を訪ねる

杉本 順一

祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響きあり。
娑羅双樹の花の色、盛者必衰の理を顕す。
猛き者も遂に亡びぬ、偏に風の前の塵に同じ。
驕れる人も久しからず、只春の夜の夢の如し。

余りにも有名な文章である。平家一門の最期場は壇ノ浦と語られることも多い。しかし、中にはここをその場としなかつた人もある。

実は私が秋の文化行事でここを訪ねるため、参加者の皆さんに聞いてもらおうと「祇園精舎」の琵琶の曲をテープに入れておいた。何度か聞いて私の思いをまとめようとしていたら「コノキョク

ワ ツラクカナシイ ワレラニハ ツラスギルキヨクナリ」と腹の底から湧き出てくる感想を感じた。

建礼門院さんのお気持ちであつたようだ。旅行にテープを持参したが、ついにそのタイミングはなかつた。私が何度か躊躇したせいでもある。

建礼門院徳子とは、平清盛の次女で、高倉天皇の中宮となり安徳天皇を生んだ人である。壇ノ浦で、八歳の安徳天皇を追って入水するが、源氏に助けられ京に戻り、後に大原寂光院に入られた。舅の後白河法皇が大原を訪ねた時に、平家の栄枯盛衰を体験して「六道（※地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天の六つの迷界）を見ました」と話されたという。

今年の八月十六日午前五時半頃、「ヒトトセノツラキオモイワ ナガカリキ オゴリテミレバ

ワズカナリケリ トクコ」と言われたのが、建礼門院と私との初対面(?)であつた。そんなことも忘れかけた九月半ば、長い夏休みをもちあましていた娘が「お父さん、京都へ行こう」「三千院に行きたい」と言う。大原なら私も……と思ひ、家内と三人で電車に乗った。

近鉄電車の京都国際会館行きが終点に近づいた頃、突然「イクヒサシ ヒトノココロヲ ワレシラズ タムケラレタル ハナイチリンモ」と建礼門院さんの心が伝わってきた。途中に花屋さんが見つからず、家内は道ぎわのコスモスを失敬して、建礼門院の大原西陵に向かった。

陵の前で、心からの挨拶をする。「アナウレシカリ オイデクダサルシアワセワ ナガキクルシミ イマハナレタリ」と伝わってきた。しばらく遊ばせてもらって帰りぎわ、「ナゴリ

ワツキネド ココロヤスズル」とのこと。来た甲斐もあつたと自己満足して帰邑した。結局行つたのは寂光院で三千院はバス。十月の文化行事参加の前に行かねばならない所だつたのだろう。

八月十六日の早朝には、トクコさんの他にも次のような伝言があつた。

「ロクハラノ タカキオゴリワ ツユシラズ ヤガテヨセクル クラキオモイヨ」／「ヤシマヨリ タダヨイキタル ダンノウラ ワレラノココロ カミノマニマニ」(知盛公・清盛四男)

「ヒトノヨヲ ワガヨトウタウ ヒトアリキ ワレラノオモイ サラニハテナシ」(二位尼・清盛妻)

彼等の今の心境が伝わってくる感じがした。壇ノ浦に沈んだ時の、その心境ではないと私は思う。それは、栄華をきわめていた時代を反省している心持ちだと感じたからである。

こうした平家の人達が、霊界で解脱出来たのはなぜだったのかを考えた時、日聖法主の著書に心が動いた。字数に限りがあるのでうまくお伝えでき



宴会の演し物「おもてやん」(10/26 野保夫さん写)

きるか不安だが、時間のある方は『なごその息吹』をゆつくり読んで頂きたい。

一、「一大事の因縁」82頁9行目より

ジョウ おかはん (キシ・日聖法主の祖母、その前世)はなア。熊野御前とゆうてな、源家の出だつたが：(略)：

源平両族の平穩を祈願し、巫女さんでこの世を果てたお方のようや。：(略)：その深い因縁によつて今世はこの神屋敷(後の大倭神宮)に生まれはつたのや。

二、「同」101頁3行目より

この時、御嶽坊大僧正は、

「この子一人を助けることは、源平一族十万人の一人が解脱したことになる。よく心して、今より隆蔵(法主の父)と力を併せ、修行に精進せよ」と、(フジエ・法主生母に)さとされたのである。

三、「霊界と現界を結ぶ哀歎の旅」192頁9行目より

：(略)：(日聖法主は)平家一門の墓所、七盛塚へ詣つた。狭い場所へごちんまりとまとめてあつたが、：：：墓石供養塔は：：：。

来るわ、来るわ、源平両族……。何万の武人、大天狗、小天狗どもの群像、どうやら両族が互いに握手するような情景だつたので、思わず嬉し涙が吹き出した。：：：(略)。(194頁2行目へ)どうやら、この度の鎮魂浄霊の旅は終つたようである。

これらを読んで、私の受けた感応の解釈が少し分かつた気がした。

八月十八日の「共に来られよ。我等が道を確かめんがため」(知盛公)、また二十日にはザンバラ髪の大將がその横顔を見せてから「屍の朽ちたる所、壇ノ浦、恨みの心、幾百年籠りてここに今もなお。清められませ。我が想いなり」(三回繰り返し)と言われた。

そうか、壇ノ浦にありし時の想念は、今も現地に籠つたままなのか。今度、私達大倭会のみんなが和やかな気を持って現地に立つことが、その慰霊であり、清め祓いのお役目だつたのだ。

壇ノ浦の戦から八百十八年

得田 壽之

ダンノウラは、幼い頃から聞き親しんだ言葉だつた。愛媛県の西端の佐田岬出身の母親から実家が平家の落ち人の末裔であり、三机の本家の倉には、そのことを示す刀などがあることを度々聞かされ、その時には決まって耳にした。

小学五年の時には、源義経の衣川の死の疑問を追いかけて始めていて、壇ノ浦はさらに身近な存在になつた。昭和六十二年、法主様によつてつれあいの典子の実家梅澤家が平将門公と縁りがあることが分つてまもなく、法主様から「平将門ノ乱は源平の葛藤の発端だつた」とお聞きしてからは、いづれ訪れなくてはならない地にまでなつて来ていた。それにもかかわらず、今回の壇ノ浦への道は遠く峻しかつた。出発前日まで、試されてか事が旨く進まずハラハラのし通しだつた。

十月二十六日は素晴らしい天気で典子と新横浜から新幹線を乗り継いでアツという間に着いた下関は、汗ばむような南国だつた。

宿舎の下関マリン・ホテルへ向かうバスの中から左手にちらつと赤間神宮が見えてご挨拶してすぐに右手に壇ノ浦の海が見えた。相模湾から太平洋を望んで育つた私には、黝く重く見えた。さすがに万感迫つて合掌しつづける。

この夜は海浜料理も美味しく、名物の宴会も楽しかつたのに何故かなかなか寝つかれなかつた。翌十月二十七日もミゴトな晴天だつた。

朝食後バスで赤間神宮の前に降りると、壇ノ浦の潮の流れは速く、大河のように見えた。

一瞬、荒海を舞台に働いて来た熊野水軍を味方につけた義経の駆け引き上手と強運を思った。

この後、赤間神宮へ向かう、左手に安徳陵が見える、この時杉本さんが急に階段の左手に下りられる。御陵を正面から参られるのに気付いて私もつづく。階段を上りきると正面の前の道は細く土塀が迫っていてかなり狭い。右手の方で「こつちから入れるぞ」と誰かが叫ぶ。それに誘われて東の脇門まで行ってみると緋の袴の神子さんが、「立入禁止」であることを両手で示される。

ところが後戻りせずに呼び寄せられるように足がどンドン動いて、私は坂を登りつめて七盛塚の前まで行き着いてしまっていた。

七盛塚は、墓石が七つではなく二列十四でかなり立て混んでいる。しかもその奥には小さな供養塔が肩を寄せ合うように集められていて、阿彌陀寺以来の平家塚の佇まいを持っていると思えた。

後で皆と改めてと、軽くご挨拶して、耳なし芳一縁りの芳一堂の木像を見やり、平家塚の碑を眺めていると、あるご婦人が墓域に入つてまもなく足に痛みを感じられたようで怯えた顔で戻つて来られ、丁度安徳さんへのご挨拶を終えてやつて来られた杉本さんに助けを求められる。「壇ノ浦の戦では足を斬られて亡くなった人もおるやろ。そんな人があんたを頼つておるんやで。コワナイ、そんな気持を受け止めてやつたらええんやで……」と杉本さんに諫められながら気をとり直して塚の前まで進む。私もつづく。そして手を合せながら、母方の先祖を想い、九年ほど前の出来事を思い返しながら柏手を打った。

その夏の東光祭の後、大倭会館で何泊かした時、私の住む町の隣町にある和光大学の芸術学部の学生とその先輩の二人連れと親しくなった。旅先の吉野の天河神社のそばの旅館で雑誌『80年代』を見て、紫陽花邑を訪ねて来た人たちだった。

いろいろな話し合っている内に学生くんが、法

主様に自分の先祖のことを視ていただきたくいとお願った。次の日かその次の日、法主様を瑞光院へお訪ねする時、二人を伴って行った。

茶の間へ招き入れてくださった二人をちらつと一目見られた法主様がいきなり学生の先輩に向かつて「あなたの先祖さんは、赤間神宮の七盛塚にいてはる人やで」と言われた。

山口だか広島県の人で、家にいろいろあつてこの人の姉さんが先祖のことを調べ歩いてみたけれど全く手懸りがつかめず分からなかったという。

この思いがけない事の流れで、学生の方はお尋ねするところではなくなつてしまった。

私は、その七盛塚に縁りのある人と姉さんがここに参られたらどうか、それから縁りのある方とはどなただろうかと心を寄せながら、しばらく佇んでいた。

そのためなのか、なぜなのか、昨日来のとらわれていた気分が晴れ体も軽くなつていた。

その足で安徳さんの御陵の正門に立ち寄つて、矢追房子さんが手向けられた花籠の前でご挨拶して来た。以前、法主様が四国の安徳陵伝承のある地を訪ねてみようとしたが、どうしても見付けることが出来なかつたと話されたのを思い出し、その時が赤間神宮へ参られた前だったのか後だったのかを、何となく考えていた。

香川、高知、熊本、兵庫などに伝承地があるのは、息を潜めて隠れ棲む平家の落ち人たちにとつて、安徳陵は心の支えだったのだろうか。

帰路のバスに乗り込む前に海辺まで歩く。現代の礎が置いてある。重い鎧を重ね着て壇ノ浦に身を沈めたという平知盛公の最後を、礎に潤色した歌舞伎の演目に因んだものだという。

左側で杉本さんが東の海に向かつて一人静かに念じておられる。私も八百十八年前の戦に捲き込

まれた赤間の関の村人たちに想いを馳せた。

右側の、低く横に長く、ハンゲルと日本文字が彫られた石碑に気付く。下関が江戸期の朝鮮通信使の瀬戸内航路の起点だったことを記念するものだった。碑文を読んでいた李章根くんが、立ち去り際に柏手を打つ。つづいて私も心を通わせていた。

波の音

岸野 春子

一応、自立生活の昇ちゃん（聾啞）には、レクリエーションがない！と気がついて、文化行事参加を思い付きました。その喜ぶこと喜ぶこと。でも、出発までは気を揉んで騒ぐ、終わるとがっかりして騒ぐのはどうしようもない。それに付き合つて何とかご機嫌にと、文化行事も私の場合、まあ生霊が先、生前供養中心となります。

そういう昇ちゃんも今年は割合、楽だったなという出発前夜、ふと船端を打つ波の音を——聞こえたわけじゃありません、私の想像力によつて、感じたのです。女連れの合戦だなんて、やつぱり都落ちというものだったんだなあ。屋島から壇ノ浦へと、女達は揺れる船の中で合戦に怯え、不自由な暮らしを強いられ、船端を打つ波の音を聞く気持はどんなだったでしょう。

そのせいでか、七盛塚では端つこの平時子（二位尼）の墓にばつと目が行きました。ひよいと（平家の栄枯盛衰も合戦も）「とんだ猿芝居や」と、頭に浮かびました。宴会で昇ちゃんと猿回しもどきをやった名残りだったのか。

赤間神宮の前で聞いた岸壁を打つ波の音は、かなり強いものでした。猿回しの紐を握っていたのは、誰だったということになるのでしょうか。

「隆家」の頃の法主 (6)

矢追 隆 義

いよいよ兄も大学を卒業することになり、卒業論文は石田茂作先生指導のもと、古墳より出土した鎧馬具^{あてがひ}だったと聞いている。親友の久保常晴氏は大学に残り、のちに教授となった。

兄は自宅に戻ることにしたが、当時、我が国では皇紀二六〇〇年記念事業として、神武天皇御東征の聖跡を顕彰すべく、時の政府は真剣に取り組んでいた。我が富雄村においても政府の呼び掛けに呼応し、神武天皇に係わる村内の伝承地を役場が中心となり調査に乗り出すが、思うようにまとまらない。まして「金鶏発祥地」ともなれば、すでに桜井では久米邦武博士、榛原では山田梅吉氏等、有名な学者等をバックに名乗りをあげ関係機関へも働きかけており、一步遅れを取る形となっていた。

しかし兄は母よりの霊示により、「金鶏発祥地」は現在の大倭神宮周辺の地と固く信じ、大学で培った学力をフルに駆使し、納得のいく立証をすべく、村に伝わる伝承・金石文字・出土品・古文書等、あらゆる面から資料を集めた。信憑性の高い内容にするため、久保氏の助言も得て没頭し、やがて『金鶏の黎明』なる研究誌を発行して、桜井説・榛原説と対等に論戦することになる。

一方、地元総代や母の信者衆への啓蒙も忘れることなく力を注ぎ、「大倭鶏龍会」なる協賛会を結成し広く会員を募っていた(写真はその時の門標)。特に中^{ちゆう}大^{だい}字^じの協力も得て、着々と具体的準備にうつることになる。その活動の第一歩とは、

神苑内に在った家屋の撤去であった。といつても当時まだ人が住んでおるし、その上、軒^{のき}桁^{たか}が八間東西に通っているような巨大な家屋であるし、移転先が砂茶屋の裏山であるし、実に困難な問題であった。機械力として現在のような勝れたものはなく、道は狭く、全てが人の力、牛車による外はなかった時代である。

難しい。しかし、兄は両親をとき伏せ移転と決断し、大工棟梁西本利一氏の腕を買って采配をまかせ、三ヶ月余りを費やして達成する。それも大倭鶏龍会会員の皆さんの手弁^{てんべん}当^{あた}りでの、絶大なる協力があつたればこそで、その苦勞は筆舌に尽くしがたいものであつた。



金鶏發祥地 鷄峯頭揚
大倭鶏龍會々員

時の波蕩(その六)

「かなながらの道」の復活

林 修 三

戦後間もない昭和二十二年のある日、亀岡天恩郷の南側の道を、街頭宣布仲間の通称「日の丸」に案内され、出口王仁三郎を尋ねるべく上矢田の「熊野館」にむかう、法主とその愛弟子青山日元等、数人の姿があつた。

しかし、その時、王仁三郎はすでに

「熊野館」を出て、天恩郷の「瑞祥館」で病の床についており、オオモトとオオヤマトを代表する二つの偉大な魂の邂逅は、現世において叶う事はなかつた。

しかし、この日のすれ違ひこそは、日本かなながら復活において特筆すべき事柄であつた。思えばそれは、遙か昔より多くの神だちが待ち望んだ「かなながら復活」と言う長い道のりを駆けつけてきた後の、最終走者へのバトンタッチにも似た出来事の様に見える。

「古代かなながら」はいつの時に我が国においても、覇道を歩む中国の霸王の出現による覇権主義的政治社会へと変わり、「すめらみこと」から「天皇」への移行は、天皇家においても他のグループと権力争いをする我よし勢力の一つのグループへと変貌を遂げさせてしまった。ここにおいて遂に形骸化し、失われようとした「かなながらの道」も、時を経て、江戸の末期から始まる我が国の宗教ルネッサンスとも称すべき、不当に押し込められ、賤しめられて来た神達の復活によって、新たな活性化を生み出す。

この神々の甦りとも言うべき系譜は、天理、黒住、大本等へと引き継がれ、終には一世の風雲児出口王仁三郎の出現を見、霸道的天皇制の崩壊へと導いてゆく。日本史において長らく続いた権力主義的、あるいは傀儡的な天皇制はここにその姿を消し、新たな真の「すめらみこと」の甦りを迎える時代が始まった。

遙かな時間を待ち続けた神たちの望みは、ここにその実現の一步を見、大法は大倭に立ち、「東方の光」として世の闇を払うべく新しき一頁が開かれることになったのである。大倭に「東方の碑」あるは、誠に意義ある事と、改めてここに認めておきたい。

あじわい日誌

11月14日 夜、大倭会館で日聖祭・直会演芸会の打合わせ。

11月15日 大倭神宮月次祭。七五三の晴着姿も交え、子供達のお参りが多く、みんな千歳飴を頂きました。

夜、交流の家でF.I.W.C.の定例委員会。韓国・中国のハンセン病回復者の村でのワークキャンプ報告や計画が話題に。後、命日の近い飯河梨貴さんを偲んで一緒にご飯を食べました。

11月23日 大倭大本宮月次祭。祭典後、大倭会館で大倭会幹事会があり、年末・年始の予定を話し合いました。

11月26日 夜、NHKの「その時歴史が動いた」でガンジীর番組を見た方もあると思います。舞鶴の藤本宏秋さんは昭和40年発行『大倭新聞』第8号に法主様と柴地則之さんが杉山龍丸さんから、ガンジীর後裔達と生活を共にされた話を聞いた時の記事を読み直した、とのこと。この号(残部なし)のコピーご希望の方はどうぞ。

11月28日 大倭病院では中期決算役員会が開かれました。
11月29日 夜、拝殿において岡山県の成羽町保存会の皆さんによる第10回目の備中神楽。雨の中、家族やカッパルなど大勢の参加者がありました。子供達の喜びと驚きの声に和み、何か懐かしい一夜でした。
12月4日 大倭神宮で金鶏祭。今年初めてお参りしようと思いついたという青山法義さんの話「今日は水雨が振るかな」と誰かが笑いながら言っていました。昔の金鶏祭はもつと寒かったらしいですが今年もけっこうな冷え込みでした」
12月6日 大倭神宮月次祭。
12月7日 故中島康治さんの五十日祭が大本宮拝殿において行われ、晴天の中、大勢の方がお参りに来て下さいました。
杉本順一さんの話「前夜、お風呂の中で『アシタワ コウジ ムカエル』と言われびつくり。この朝、法主さんの奥津城では『シメイヲ マットウシテ

新年のご挨拶を申し上げます

宗教に帰依したからとて、その宗教が人に幸福を与えるものではない。

帰依さえすれば必ず神や仏の加護があつて幸福になれると考える人は強欲の輩に限られている。

本年もよろしくお願い致します。

大倭六十年 元旦

大倭紫陽花邑

代表

矢追

家麻呂

邑人一同

和子さんがこの夜、帰幽されました。享年38歳とのことです。
大倭安宿苑では

菅原園

11月30日 菅原園は改築スタートの節目、矢追美壽紀理事長も来てくれて総勢約180名が参加、手作りの超豪華料理で年忘れ会を盛り上げました。

須加宮寮

11月23日 家族交流会で家族や福祉事務所、ボランティアと食事やゲームを楽しみました。

長曾根寮

11月19日 伏見保育園園児の皆さんが手遊びや歌で、遊びに来てくれました。

八重垣園

11月20日 長曾根寮デイサービスの文化祭に茶道のお点前で参加・交流しました。

11月26日 俳句の会。「霧深く窓あけて見る今朝の空」「秋深し和服が似合う京の町」「突風に桜紅葉の宙に舞う」

お詫び

先月号(11月号)の藤本敏夫さんの追悼文の中で、妻の加藤登紀子さんの言葉として紹介している「若くして有名になると、(中略)、生涯を終えた」までの4行は、木村聖哉さんの藤本敏夫さんへの人物評であり、筆者・杉浩史の認識誤りでありましたので、お詫びして訂正をします。どうも申し訳ありませんでした。

杉輩

あんない

* 年始祭(大倭神宮)

1月1日(祝)午後0時半から紫陽花邑内の諸霊へご挨拶して午後2時から大倭神宮にて。

* 月次祭(大倭神宮)

1月6日(火)午後2時より大倭神宮にて。

* 大倭会主催第四三回禊会

1月11日(日)午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

* 大とんど

1月12日(成人の日)午前10時より大本宮西の斎庭にて。

* 月次祭(大倭神宮)

1月15日(木)午後2時より大倭神宮にて。

* 月次祭(大本宮)

1月23日(金)午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

お願いとよびかけ

法主様ご帰幽満10年を記念して大倭大本宮で計画しておられる法主様奥津城の整備造成に、何卒各人の分に応じご協力をお願いします。

大倭会会長 中西 正和

1. 奈良信用金庫 学園前支店 普通0302639
口座名 大本宮特別整備基金
中西正和
2. 郵便振替口座 00900-6-241836
口座名 大倭奉賛会